シン・研修報告書
富山県医療ソーシャルワーカー協会

令和４年度定例研修会

テーマ「医療ソーシャルワーカーに求められるアセスメントの視点」

講師：河野　聖夫　氏
(新潟医療福祉大学　社会福祉学部　社会福祉学科　教授)

開催日：令和４年9月４日　09：00～11：30

参加者の声：富山市民病院　島田佳奈さん

　実例をふまえた先生の話の中で、二つのアセスメントの視点がありました。
アセスメントの視点①が人間理解の視点です。人間理解には**生命力、生活力、成長力の3つのLife**に時間・空間を加えたライフイメージが必要になります。クライエント自身がこれまでの人生でどのように問題解決をしていったのかという視点が、今後の支援の提案につながります。
アセスメントの視点②が臨床像と問題の中核です。この視点はOGSVモデルから来ています。臨床像とは援助者から捉えられているクライエントの姿とクライエントが置かれている状況を指します。クライエントの姿は**過去・現在・未来**の流れと、周囲の環境で語られます。置かれている状況は、クライエントとその周囲の相互作用や直面する課題の影響などから捉えていきます。問題の中核は臨床像を構成する枠組みであり、本質的な問題です。課題が生じている要因や、状況の核心部分になります。
私自身ソーシャルワーカーとして、初めは富山市役所の福祉関係の部署を経験し、その後富山市民病院に異動して今年で4年目になります。現在は主に消化器内科の病棟を担当し、退院支援の場面で患者・家族に関わることが多い日々を送っています。急性期病院という特性上、**アセスメントから実際の支援までの期間が短く**、また近年は新型コロナウイルスの影響もあり直接患者・家族と話すことのできる機会も減っていました。先生の講義を受けて日々の業務を改めて振り返ると、忙しさに追われ、患者・家族から表出されるニーズの元になる課題まで着目できていなかったことに気付き、改めて自分の未熟さを痛感させられました。制限のある内であってもしっかりアセスメントを行い、**元々クライエントの持つ力やソーシャルネットワークを活用しながら安心して地域に戻れるような支援を今後より一層心がけていきたいと思います。**

広報事業の一言つぶやき

この感想からでも、日々様々な想いを持ってソーシャルワーク実践をされていることが伝わりますね。そして、研修から更にアセスメントを掘り下げ、かつセルフアセスメントもバッチリされており、私たちも頑張っていきたいと思いました。コロナ禍で先行きが不透明で日々の業務に追われることがありますが、いち専門職の前に一人の人間なので、その時は日々の業務に追われてもいいと思います。そんな時こそ、皆で支え合って頑張っていきましょう。そして、是非島田さん今度、我々広報事業のアセスメントをしてください(笑)(#^.^#)